

〔くらしを彩る工芸―飲食器・装身具・文房具―展によせて〕

## 朱漆の食器をめぐる

赤色は火や血を連想させるためでしょうが、世界の多くの地域で原始の時代より特別な色とされています。日本においても、縄文時代にはすでに赤色の原料となるベンガラ(酸化鉄)や朱(硫化水銀)が使用され、土器や木製品に塗装されたり、死者にふりかけられたりしていました。土器や木製品を赤色に塗る際には、精製した漆に顔料を加えた赤色漆が、発色もよく、剥落も少ないためにしばしば用いられています。赤色漆の中でも硫化水銀を顔料とした朱漆は特に高級なものとされ、ベンガラ漆を塗り重ねた後の上塗りとして用いられることが多くあります。

平安時代に入り、公式な宴で使用される飲食器が身分によって細かく定められると、朱漆器は高貴な器として位置づけられます。律令の執行細則を集大成した『延喜式』大膳職上には「右新嘗会宴食料依前件。雑器親王已下三位已上朱漆。四位已下五位已上烏漆。并土器。」という記述があり、新嘗祭の宴において、親王から三位までは朱漆器、四位・五位は烏(黒)漆器・土器ということが示されています。『延喜式』大炊寮では五位以下の器の材質が変化しますが、いずれにしても朱漆器は高位の器とされています。天皇を中心とする宴だけでなく、上流貴族の催す宴でも朱漆器は用いられていました。平安時代に権勢を誇った藤原氏の

頂点に立つ藤氏長者の家においては、正月の祝いの宴で朱漆の飲食器と台盤のセットが使われました。このセットは朱器台盤と呼ばれ、家宝として藤氏長者が受け継ぐもので、藤原家における「三種の神器」の一つに相当するものでした。このように、朱漆器は単なる食器としての機能を持つだけでなく、身分や地位を視覚的に表し、序列を明確化する役目も担っていました。

上流貴族以外の階層でも漆の食器は使われていましたが、黒漆塗りのものが主でした。平安時代末の絵巻である『病草紙』には、下級役人と思われる男の食事風景が描かれており、黒漆地に小さな赤い文様を散らした器を使っています。「一遍上人絵伝」「東征伝絵巻」「絵師草紙」など鎌倉時代の絵巻を見ましても、庶民や僧侶、下級役人は、黒漆器もしくは外黒内朱の漆器を食器として用いており、内外とも朱で塗られた総朱の器は依然として簡単に使用することのできない貴重な器であったことが窺えます。

それが室町時代半ば以降の絵巻になりますと、「真如堂縁起絵巻」(図1)や「酒飯論絵巻」のように、庶民階級の人々も総朱の器を使用している姿が見られるようになります。遺跡から出土する漆器におきましても、15世紀頃から内外ともに赤色漆が塗られた器の出土例が増え、16世紀にはさらにその傾向が強まることが報告さ

れています。絵巻では赤色の器がベンガラ漆塗りか朱漆塗りが厳密には区別がつかませんが、出土漆器を調査すると、総赤色の漆器はベンガラ漆の場合も朱漆の場合もあり、製作工程にも粗密の差が見られるようです。普段使いの食器には簡素な作りのベンガラ漆の器が使われることが多いと予想されますが、朱漆器も貴族だけでなく、より広い層で使用されるようになってゆきました。

室町時代頃から盛んに使用された朱漆塗りの器は伝世するものも多く、それらは「根来塗」の呼称で親しまれています。「根来塗」とは、本来は紀伊国の根来寺で製造していた漆器を指すものですが、根来寺に由来するものは僅かしか残されておらず、木質の生地に錆漆などで下塗りをし、黒漆の中塗りを施し、朱漆を上塗りして仕上げた堅牢な作りの実用の器を広く称するものとなっています。

大和文華館所蔵の「根来塗四椀」(図2)も根来塗という言葉が冠されており、内外ともに上塗りには朱漆が刷毛目の目立たぬように丁寧に施されています。口縁は手ズレによってわずかに朱漆が剥げ、中塗りの黒漆がのぞきます。四椀とは大小四つの椀を重ねると一つに納まるもので、寺院などの食器として用いられました。高台の内側は朱ではなく黒漆で塗装され、中央に小さく朱で梅鉢文様が描かれています(図3)。根来塗の椀や楀子などには裏面に寺や子院の名が記されていることもあります。松葉など紋らしき簡略な文様が描かれているものもしばしば見受けられます。所蔵者を示すものと思われ、こう

した器が寺や家に代々大切に伝えられていたであろうことが想像されます。

15世紀から16世紀にかけて、朱漆を含めて漆器の食器が広く普及したことは、来日した宣教師ルイス・フロイスが『日欧文化比較』(天正13年/1585)において「われわれの食器類の組は銀か錫で作られている。日本人のは真紅色か黒色かに漆を塗った木製のものである。」と記していることから窺うことができます。しかし江戸時代に入ると、漆器も引き続き使用される一方で、陶磁器界が大きな発展を遂げ、食器類を大量に生産するようになります。浮世絵に描かれる食事の風景からは、染付けで文様を表した磁器の食器などが増加することが見て取れます。陶磁器の食器に占める割合が増える傾向の中、汁椀は熱さを伝えにくいことから漆器が選ばれ続けることはよく知られますが、特に朱漆器に関して言えば、遊郭で用いられる盃や奉納の盃(図4)など、特別な場における盃に朱漆器が多く用いられていることが注目されます。現代の生活を振り返ってみても、日常使用する椀類は透き漆や黒漆、外黒内朱のものが多いですが、正月にお屠蘇を飲む盃、結婚式の三々九度の盃は総朱の漆器が好まれています。朱漆の器が特別な日を華やかに彩る器として現代でも受け継がれていることが感じられます。(宮崎もも)

※図1は『続々日本絵巻大成 伝記・縁起篇5』(小松茂美編、中央公論社、1994年)より、図4は『羊遊斎 江戸の蒔絵師』(五島美術館学芸部編、五島美術館、1999年)より複製しました。



図1



図2



図3



図4

図1 真如堂縁起絵巻 真正極楽寺蔵

図2 根来塗四椀 大和文華館蔵

図3 図2の裏

図4 三升紋蒔絵盃(原羊遊斎作・七代目市川團十郎奉納) 成田山靈光館蔵

季刊 美のたより No.163

平成20年7月4日

発行 大和文華館